伝記的事実は作品世界への鍵？

佐　藤　宏　子

ウィラ・キャザーとの出会い

20世紀前半のアメリカを代表する作家の一人、ウィラ・キャザーの初期の代表作『マイ・アントニーア』を通して、これまでのウィラ・キャザー研究の問題点を検討し、これからのキャザー研究の方向を探ってみたいというのが、私の話のポイントです。

話の糸口として、私とキャザーとの出会いから始めようと思います。そのことを通して、これまでのキャザー研究の現状が明らかになってくるのではないかと考えるからです。私がキャザーという作家を知ったのは、今から半世紀以上前、大学三年の時でした。当時、アメリカ文学史に女性作家の名前が上がることは殆どなく、アメリカ文学は男性の文学と言われていました。受講した西川正身先生の「アメリカ文学概論」で先生はアメリカを代表する作家の一人として、ホーソン、メルヴィル、トウェインなどとともに、キャザーを上げられ、彼女の『マイ・アントニーア』からの一節をプリントで配布されました。それが、小説の第二部の終わり近く、夏の一日、語り手のジム・バーデンがアントニーアや他の移民の娘たちと大平原にピクニックに出かけ、真っ赤な巨大な円盤のような夕陽を背景にして、どこかの農場に取り残された鋤が黒々と浮かび

上がる印象的な光景を描いた一節でした。「太陽に絵を描く」といった印象的な表現に魅力を感じましたし、これがアメリカの女性作家と接した初めての経験でした。しかし、私が、キャザーという作家と付き合い始めるのは、その出会いから数年後のことで、その間に、児童文学者の石井桃子さんを通して、再度キャザーの世界に近づく機会を与えられ、留学先のアメリカの大学で論文を書く時に、キャザーを取り上げることになりました。

1950年代のキャザー研究とその後の展開

当時、キャザーに関する入手可能な参考文献は5冊、それも研究書といえるものは、E. K. Brown の *Willa Cather: A Critical Biography* と David Daiches の *Willa Cather* の2冊のみで、残りは生前のキャザーを知っていた人の回想録2冊と、彼女が子ども時代を過ごしたネブラスカ州のレッド・クラウドという町の人が、彼女の作品の中の人物や出来事と、現実の場所やキャザーの経験とを結びつけた「案内書」のようなものです。しかも、現在でも代表的なキャザーの研究書とされている Brown のものも、副題が示すように伝記的な事実と作品の世界を結びつけることが、根本の姿勢です。他の作家の研究と比較すると、キャザー研究の異常なまでの伝記的事実へのこだわりの原因は何なのでしょうか？その一つは、作者キャザー本人の言葉にあると考えられます。*One of Ours* でピュリッツァー賞を受け、作家として絶頂期にあった1921年、キャザーは雑誌のインタヴューで次のように言っています。「八歳から十五歳までは作家の形成期です。無意識のうちに、根底になる素材を集めているのです・・・。自分の主題となる材料は十五歳までに獲得しているのです。」キャザーにとって、八歳から十五歳という時期は、彼女がネブラスカ州のレッド・クラウドで暮らした期間と一致します。このあまりにも有名になったキャザーの言葉が、キャザー研究者たちを惑わせた可能性は十分考えられます。また、最初の本格的なキャザー研究とされている Brown の本は、キャザーの遺言執行人だった Edith Lewis（1908年以降、生涯キャザーが生活をともにした人）の依頼で書かれたもので、Brown に資料を提供するために Lewis の *Willa Cather Living*（1953）は書かれました。その中には、こんな文もあります。「『マイ・アントニーア』と *A Lost Lady* のフォレスター夫人はキャザーの他の人物より実在の人物と密接に結びついています。アントニーアの実名はアニー・サディリックと言います。」このように、作中の人物や出来事を、実際のキャザーの経験と結びつけ

る姿勢は、今日まで続いていると言えます。

キャザー研究の第一人者とされ、これまでに2冊（1970年と1987年）の大部のキャザー評伝を出版しているJames Woodressはそれぞれの副題をHer Life and ArtとA Literary Lifeとしています。極端な見方をすれば、キャザーの伝記的な事実と作中の出来事、出会った人物を照合し解説しているような印象を与えるもので、キャザーが自己の文学を通して表現したものを知りたいと思う読者には物足りないという印象はぬぐえません。また、彼を編集主幹としてネブラスカ大学出版局から膨大な注をつけて出版されている彼女の主要作品の"Scholarly Edition"も、その傾向を色濃く反映したものとなっています。『マイ・アントニーア』を例にとれば、作中アントニーアを身ごもらせた男の実名はWilliam James Murphyだったとか、語り手ジムの祖父の農場が鉄道の駅から20マイルほどと書かれているが、実際のキャザーの祖父の農場までは15マイルであった、といった情報が提供されています。もちろん、ネブラスカの植物や動物についての説明、当時の農作業の解説など、現代の読者にとって貴重な知識を提供してはいますが、これらの、あまりにも細かい事実との照合が、読者の作品世界への集中を妨げていることも否定できません。

このようなキャザー研究に一つの大きな変化をもたらしたのが、キャザーの同性愛的な人間関係とそれがキャザーという作家の自己形成、ひいては彼女の芸術に制約を加えたのではないかという指摘です。キャザーの同性愛の問題は、彼女の生誕百年にあたる1973年ごろから、公に語られるようになりましたが、その視点からのキャザー研究がなされるようになったのは、Sharon O'Brien, *Willa Cather: The Emerging Voice*（1987）以降のことです。キャザーが生きた19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会の同性愛に対する不寛容さが、キャザーに社会との距離を置く姿勢を取らせ、それが、彼女の抑制された小説形態や表現の基となったというO'Brienの指摘は興味深いものです。しかし、O'Brienはキャザーが本格的な作家として出発する*O Pioneers!*（1913）までを対象にしています。それまでに形成されたものを土台に作家活動を続けたということなのかと思いますが、読者の側としては、物足りない印象があります。しかし、これまでのキャザー研究に一つの新しい方向を示したという点で、高く評価されるべきものと考えます。

また、最近の多文化主義的な考えに基づいて、アフリカ系アメリカ人や、ネイティヴ・アメリカンに対するキャザーの姿勢を批判し、作家としての限界を指摘する批評もあります。

今後のキャザー研究への示唆

どちらかと言えば、キャザーに対する現代の批評はネガティヴな面が強調されているように思われますが、彼女が生きた時代の中でもう一度彼女の作品を考えてみたいというのが私のスタンスです。これからのキャザー研究に変革をもたらそうなどという大それたことを考えている訳ではありませんが、今回彼女の『マイ・アントニーア』を訳すという作業の中で、テクストを読みながら考えた幾つかのことをお話して、これから、キャザーの世界を探ってみたいと思っていらっしゃる方たちに何らかの手がかりを提示し、私の話の結論にしたいと思います。

先ず、認識しておきたいのは、キャザーという作家は20世紀前半、二つの大戦の間に作家活動をした人です。多文化主義も、公民権運動も、フェミニズムも、社会の主流とはなっていない時代です。現在の批評家たちは、キャザーに対しある意味でない物ねだりをして、彼女の限界を指摘していますが、人間は自分の生きた時代の制約の中で自己を形成していく生き物だということを認識しておく必要があると思います。Jacques Barzunではありませんが、キャザーが生きた時代は、ギリシャ・ローマの文明に始まる西欧文化が世界を支配していた時代です。その文明の流れの中で、アメリカという国家が覇権国家として強大化していきました。農業国家から工業中心の近代国家への変貌から生ずる歪が露呈し始めたとはいえ、世界はヨーロッパとその子アメリカを中心に形成され、まだアメリカン・ドリームといわれる成功の夢を見ることが可能な時代でもありました。そのような時代背景の中にこの小説をおいてみる時、これは単なる大平原で育った一人の少年の成長物語として片づけることのできない問題を抱えている作品だということに気付かされことになります。そのずれは、実は作品の発表当時から、多くの読者が意識していたことでもありました。現在まで多くの読者が抱く「なぜ、ジムとアントニーアは結婚しないのか」という素朴な疑問も、その現れの一つと考えることができます。

この作品の語り手、ジム・バーデンは果たしてどんな人物だったのでしょうか？両親と死別したジムは、ネブラスカの祖父の農場で少年時代を過ごし、ネブラスカ大学で学んだ後、ハーバード大学の法学部を卒業、ニューヨークで弁護士となり、富豪の一人娘と結婚。大陸横断鉄道会社の顧問弁護士として成功します。これまで、読者は「序文」の中で彼の結婚は幸せではなかったという作者の言葉につられて、ジムを人生を受け身の姿勢で生きた失敗者のように思

いこむ傾向がありますが、いわば、アメリカ的な成功の夢を実現したジムの目を通して、アントニーアの生き方が語られていることに、改めて注目する必要があるように思います。

また、ボヘミアからの移民であるアントニーアの父親に対してジムが抱く、異常ともいえる親近感にも注目すべきだと思います。自分が一年のうちに相次いで亡くした両親への思慕の情が全くと言ってよいほど示されていない半面、故国では熟練したタペストリーの織工であり、音楽をこよなく愛したアントニーアの父親を生涯を通して慕い、自分の行動の尺度にする理由は検討の必要があると思います。血縁ではなく、文化的絆といえるもので、ジムは自分とアントニーアの父親、そしてその娘のアントニーアと結びついているのです。

もう一点、この小説で注目するべきことがあります。それが、作中で用いられている、ウェルギリウスの『アエネーイス』と『農耕詩』への言及です。特に『アエネーイス』はご承知のように、ローマ建国の始祖であるアエネーアスのトロイからイタリア半島へ祖国の神々像と父親と息子を伴っての苦難の旅路を描いたもので、西欧文学はこのウェルギリウスの長大な叙事詩から始まったと言われるものです。そのようは古典文学を自分の作品の骨格のようにキャザーが用いている意図は検討の価値のあるポイントだと考えています。

私は、伝記的事実は作品の世界を解く鍵かという疑問から出発しました。確かに、キャザーの日常生活の些細な事実を作品の中の出来事と結びつけるというこれまでのキャザー研究の方法は不毛な作業とさえ言えるかも知れません。しかし、20世紀前半に生き、創作したキャザーの生涯と作品の世界を重ね合わせる時、キャザーの作品は彼女とその時代が夢見たアメリカの姿を描いた貴重な記録として興味深く読めるのではないかと考えています。